

奈良坂小考、あるいは場の記憶をめぐる

橋本裕之

- 一 ふたつの奈良坂
- 二 境界としての奈良坂
- 三 境界としての奈良坂（承前）
- 四 坂の途中にて

一 ふたつの奈良坂

かつて奈良坂はふたつ存在した。大和と山城との国境に東西にひろがる奈良山（と）言っても丘陵だが、その西をつらぬくのが歌姫越、東をつらぬくのが般若越、どちらも大和と山城をつなぐ要路である。このうち、古くから奈良坂と呼ばれていたのは歌姫越で、平城京大内裏のあたりから歌姫を経て宇治に通じていた。一方、般若越は北山越とも呼ばれており、平城京の東京極大路を北にたどって、般若寺から梅谷を経て木津に通じていた。

後者は寛永年中（一六二四〜一六四四）ごろから奈良坂村が繁栄してゆくにしたがって、京街道（現在の国道二十四号線）の一部に組み

こまれる。平安京への遷都ののち、奈良の中心は外京に移動したためか、西の歌姫越よりも東の般若越が多く用いられるようになり、それにつれて奈良坂がふたつ存在する事態が生じたのである。しかし『平家物語』治承四年（一一八〇）十二月廿八日の条には、平重衡が南都を攻めたさいに、興福寺の衆徒が奈良坂および般若路に要害をつくった旨が見えるから、奈良坂が本来は歌姫越を意味しており、ふたつの奈良坂がまったく別々の地であったことは明らかである。

ところで、奈良坂の字義を忠実に理解すれば、奈良の坂、すなわち奈良へ通じる坂ということになる。こうした発想は奈良の側からは生まれるべくもないから、命名にさいしては、京の側から注がれた不特定多数の視線が作用したものと思われる。すなわち、奈良坂とは常に京の存在を前提としていたのである。したがって、奈良が平城京を意味した時代には、京から直接に大内裏のあたりに通じる歌姫越が奈良坂であったらうし、興福寺や東大寺の門前郷として発展した後代になると、地の利に勝る般若越が奈良坂の名称を継承しても当然であった。⁽³⁾

それでも『江家次第』には、春日祭勅使次第として、梨原から一条・二条大路を経て、興福寺の北辺・東辺を通過して春日社にいたること、さらに不退寺前をすぎて帰京することが記されているから、歌姫越も依然として利用されていたと考えられる。京から春日社に参詣するおりに、一般に歌姫越が好まれたらしく、永祚元年(九八九)三月の一条天皇による春日行幸(『小右記』)や、寛弘四年(一〇〇七)二月の藤原道長による春日参詣(『御堂関白記』)も、歌姫越の経路をとったようである。

それだと、奈良山を越えて大内裏を南にのぞむために、平城京が都城のレベルで体现していた天子南面の思想にのっとっていることになり、じしんの権威に宇宙論的根拠を与えようとする立場にとつては、つごうがよかったのかもしれない。一条大路を経て二条大路を東に向かう行列は、条坊がかつて天皇の権力を眼に見えるものにする仕掛けであった記憶を喪失していなかったと察せられる。じっさい、一条大路は佐保路とも称されて総国分寺(東大寺)と総国分尼寺(法華寺)とをつなぎ、二条大路は平城京の朱雀門に通じていたのである。

しかし、至徳二年(一三八五)のことになるが、足利義満の春日参詣のばあいだと、下向路は「御幸路敷。将又可為東路事」(『師盛記』)と定められており、すでに般若越を利用している。平城京がもはや権力を視覚化する舞台としての機能を失い、巨大な残滓物にすぎなくなった時代の到来である。

ところで、ふたつの奈良坂は奈良山を共通の母胎としている。奈良

山の一带は古くから墳墓の密集する地として知られ、西部の佐紀丘陵には垂仁・成務・称徳・平城の各天皇陵をはじめとして、神功皇后陵に比定される古墳、垂仁天皇皇后日葉酢媛陵、仁徳天皇皇后磐之姫陵などが分布している。また東部の佐保丘陵では、元正・聖武・元明の各天皇陵、光明皇后陵、文武天皇皇后宮子陵、応神天皇皇子大山守命の墓などがあげられるだろう。奈良山は死者の帰りつく母胎でもあったのである。「昔こそ外にも見しか吾妹子が奥つ城と思へば愛しき佐保山」(『万葉集』巻八)、大伴家持にとつても佐保山は亡き妻の墓所にほかならなかった。

平城京は陰陽思想の方位観に基づいて四神相応の地に造営されたから、北に位置する奈良山には玄武のイメージが投影されていたと考えられる。玄武は北を象徴しており、また五行では水、五色では黒、四季では冬を意味する。万物の帰するところ、生命のはらまれる胎内として、陰気のきわまる死の方位が玄武であった。奈良山にも同じような象徴機能は託されたにちがいない。多くの墳墓がそのことを教えている。また、『万葉集』巻三には「長屋王、馬を寧楽山に駐てて作る歌」として「佐保過ぎて寧楽の手向に置く幣は妹を目離れず相見しめとそ」とあって、奈良山の峠(手向)が旅の途中で幣を供える地であったことがわかる。そこは生者が奈良山に死を嘆ぎわけたところ、生と死が出会い境界にほかならなかったのである。ちなみに、柳田国男が峠について語るところに耳を傾けてみよう。

行路の神に手向するのは必ずしも山頂とは限らぬ。逢坂山は



図1 奈良坂周辺の地図（この地図は建設省国土地理院発行の2万5千分の1の奈良市地形図を使用）

二 境界としての奈良坂

山城の京の境、奈良坂は大和の京の境であるから、道饗の祭をしただけで、そこが峠の頂上であった為ではなからう。⁽⁵⁾

幾重にも境界の性格を与えられたこの地にあって、幣とは、死の予兆に促されるように新たな現実へと移行していった人々が生み落とされた生の痕跡である。

とりわけ奈良山東端の鞍部に位置する般若越の奈良坂は、平城京から奈良へと引き継がれた都市にとって、常に北東(良)に当たっていたから、鬼門の地と観念されていたはずである。陰陽思想によれば、良は北東の隅にあって、万物が終焉しつつも新たな誕生へと移行する転回点とされている。⁽⁶⁾ 北から東、陰から陽、死から生へと展開する急所を鬼門として忌み嫌ったのは、ふたつの異なった状態を兼ね備えているために、急激な変化が誘発されることを危険視したせいであろう。鬼門の方向には床の間、戸口、湯屋、廁などを設置することを避け、鬼門除けとしては屋根に鬼瓦をつけたり稲荷神を祀ったりする例が広くうかがわれる。⁽⁷⁾

このように見てくるならば、都市の誕生と同時に発生した鬼門として、奈良坂ははじまりのときから、すでにある含意をとまわずしてはけっして観念されなかった場であったにちがいない。以下で扱おうとするのも、ここ般若越の奈良坂である。平安京の時代を経て、奈良の中心が東部に移った中世において、さらには現代においてもなお、奈良坂のイメージはいつも、この地にまつわる集合的記憶の束から紡ぎ出されているかのように感じられる。⁽⁸⁾ そして、もはや言うまでもな

かるうが、場にまつわって新たな記憶が生み出されてゆく消息を明らかにしようとする立場にとっては、きわめて有効な手がかりを提供してくれるように思うのである。本稿はそのための、いわば予備的考察としての性格を強く与えられている。

一一 境界としての奈良坂

しばらく前のことになるが、昭和六十年(一九八五)十二月十八日、つまり春日若宮おん祭の最終日に奈良坂に出かけてみた。あのときはたしか、奈良坂はまだ二度めだったように記憶している。雲井阪と刻まれた碑(写真1)を右手に見ながら東大寺の転害門(写真2)前を



写真1 雲井阪と刻まれた碑

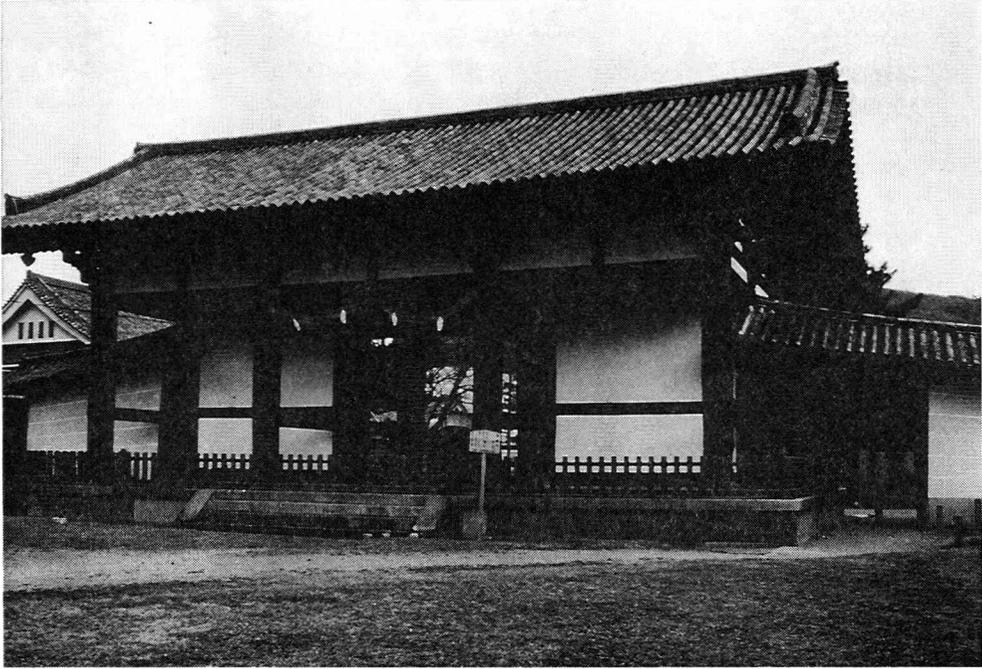


写真2 東大寺転害門（笹原亮二氏撮影）



写真3 佐保橋と石橋



写真4 川上蛭子神社

すぎると、やがて佐保川にかかる佐保橋に行き当たる。ここで道はふたつにわかれるが、まず右手の国道二十四号線を佐保川沿いにさかのぼってみよう(写真3)。

市宮東之阪住宅を抜けてしばらくすると、川上蛭子神社の鳥居が見えてくる(写真4)。当時、この一帯は田園風景をよく残しており、人気のない神社はひっそりとたたずんでいた。とは言うものの、蛭子命を祀るこの川上蛭子神社は、戦前には商売繁盛の神として平素から多くの参拝者を集めたらしく、とくに十一月九日の例祭には大賑わいを呈したという⁽⁹⁾。また、境内の伊雑神社は五穀豊稔の神である「ノ神」(野神)を祀った神社とされ、主に川上町に住む農家の人々が信仰している(写真5)。

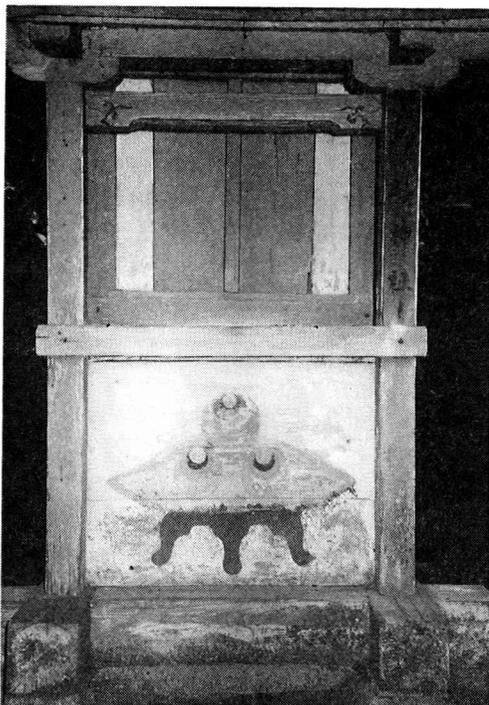


写真5 伊雑神社

川上蛭子神社前の佐保川には「禊ぎ場」と呼ばれる場所がある。東大寺二月堂の修二会にさいして、かつては練行衆がここで水垢離をとった。ちなみに現在は、佐保川の水を使用するだけに簡略化されているようである。また奈良市北之庄では、鎮守神社で行なわれる秋祭に臨んで、頭屋が「禊ぎ場」の小石を持ち帰り、風呂に入れて身を清めたいらしい。こうした伝承はいずれも、「禊ぎ場」が特別な意味を与えられた聖なる場所であることを示しているのではないだろうか。

ただし、このばあいの「聖」とは、限定された地域のなかで考えられるべきものではなく、佐保川の水源を擁する春日山にまで視野をひろげて捉えておかなければなるまい。春日山が農耕と深く関わる水神・蛇神・龍神を宿しているために、とりわけ外部として観念されてきた消息については、すでに春日若宮おん祭と関連させて論じたことがあるので参照されたい。⁽¹⁰⁾ いずれにせよここでは、「禊ぎ場」に認められる「聖」が佐保川の水源を擁する春日山に由来していると思われる、そのことを確認しておきたいと思う。じっさい、春日山が外部として観念されてきた消息を知るための手がかりは、とりわけ奈良の盆地部(国中)と東部高原地域(山中)とが最も接近する佐保川流域に集中しているのである。

ところで、こうした事実を前提としながら、春日断層崖の北限をなしている佐保川を境界として捉えようとするとき、たとえばつぎのような言説は指針として有効ではないだろうか。

このように「境の場所」は、現実には郡界・村界のような政治・

社会領域の境界であり、一方また、山・川・海と平地の接する境界でもあるが、観念の上では、われらの世界と別の世界、文化の及ぶ世界と自然(wilderness)の世界、この世とあの世の境界をなしている。後者の意味での境界はしたがって線ではなく、「意味の貯蔵庫」としての一つの立地(Standort)であり、この立地は漸移帯であると同時に媒介者である。⁽¹²⁾

——とすれば、川上蛭子神社にまつわるいくつかの記憶は、境界のシンボリズムに媒介されつつ外部のイメージを刻印されていたと考えてよさそうである。だからこそ、商業や農業といった、境界を横断して外部と交感する営みをつかさどる神への信仰が堆積したのであろう。何よりも水界への遺棄を内容とする蛭子伝承を受けとめたのであろう。今度は佐保橋ではなく、左に隣接する石橋を渡って旧道をたどってみる(千坊坂)。鎌倉期に忍性が創設したと伝えられる頼者の救済施設、北山十八間戸はそこからすぐ近くの川上町坂ノ上にあった(写真6)。はじめ般若寺の東北に建てられたが、永禄十年(一五六七)に焼失したために(『多聞院日記』、寛文年間(一六六一〜一六七三)に東ノ坂・北山とも称する現在の地に再建されたのである(『平城坊目遺考』附録)。この、南面して東西にのびる十八室の棟割長屋は一室約四畳敷、各裏戸(入口)に「北山十八間戸」なる刻書があつて、ふたつの井戸を持つ前庭からは興福寺・東大寺が一望できた。周囲をめぐってみると、その一角が見晴らしのよい高台であることがわかる。坂の途中で三叉路の辻に位置する立地条件や、かつては頼者を集め、

二 境界としての奈良坂



写真6 北山十八間戸



写真7 浄福寺

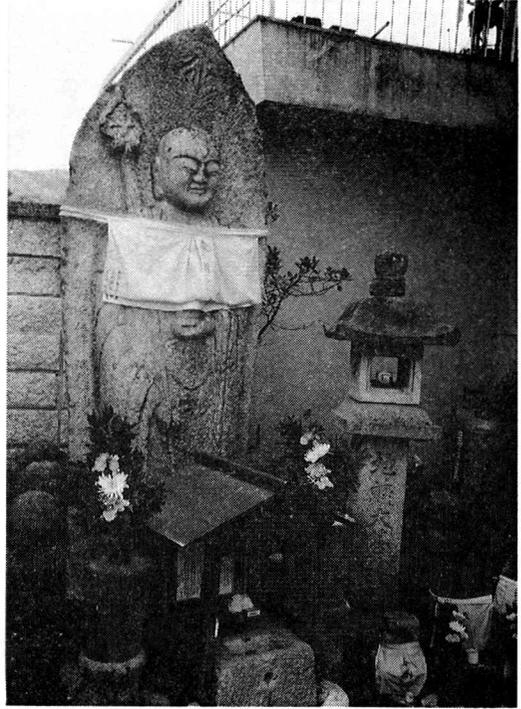


写真8 夕日地藏

第二次世界大戦後の一時期にも引揚者のかりの住居になった用途にも、境界としての性格が見受けられるから、その示唆するところは外部のイメージに彩られていたものと思われる。詳しくは別稿⁽¹⁴⁾に譲りたいが、奈良坂に沈没する場の記憶を強く感じさせる建築物として、とくに注目しておきたい。

北山十八間戸を見下ろすように建つ浄福寺(写真7)と夕日地藏(写真8)との間を走る坂(狭義の般若坂、または浄福寺の開山源故上人に因んで源故坂とも称する)をあがってゆく(写真9)。比較的急な坂である。この一帯、現在では興善院町に統合されているが、以前は東側を興善院町、西側を川上出屋敷町と称した。『平城坊目考』巻之三



写真9 坂のある風景



写真10 奈良少年刑務所

には川上出屋敷の項に「北山十八間戸 及東坂 等あり」、また「古老云當所ハ先年断罪刑罰人の首級及尸骸を此所に肆す其後高座山に移すと云々」とあるから、刑場・墓地のあったことが知られる。喜田貞吉はこれについて、「川上町の名は今も奈良市の北部、奈良坂の南に存し、北御門・出屋敷・東の坂等、亦皆古への川上郷の中である。ここに一種の賤者の居たことは由来頗る久しいもので、……」と述べている。⁽¹⁵⁾

そのままますますに進めば般若寺・奈良豆比古神社に行き着くのだが、その前に少し左へ入ってみると――、長い塀の先に聳える赤レンガ造りの純洋風建築物が目飛びこんでくる！ 明治三十四年（一九〇一）に着工、同四十一年（一九〇八）に完成した奈良少年刑務所がそれである（写真10）。広大な敷地と相俟って、あたりを圧倒するような威容は、いかにも周囲の景観とそぐわないちぐはぐな印象を与えるが、にもかかわらず境界に立ち現われたモノとして、豊かな奥行きとひろがりを見せ、北山十八間戸とも共有しているように感じられる。奈良少年刑務所がパノプティコン（一望監視施設）⁽¹⁶⁾の原理に基づいて奈良坂に造営されていたこと、その意味ではすこぶる暗示的であった。

ユートピアは、現実の国家の支配からのがれようとする大都市的なるものVが幻視したもうひとつの^国家Vであり、監獄は、国家権力が大都市的なるものVを顛倒させて、都市の胎内に割り込ませたもうひとつの^都市Vであった。⁽¹⁷⁾

前田愛はこう述べたのちに、監獄とユートピアとが通底する側面について具体的に検証してゆくのだが、ジェレミー・ベンサムの考案し

たパノプティコンを、空間の恐怖が獄舎の内部構造に変換された装置としてとりわけ重視している。⁽¹⁸⁾パノプティコンは氏にしたがうならば、「監視塔に配置された看守が囚人からは見られることなく、その一挙一動をすべて観察できる (seeing without been seeing) 視覚の優位性に要約されるが、逆に囚人の側では監視塔の内部を見とおすことはもちろん、独房の側面を仕切っている壁にさえぎられて仲間同士の接触をはかることもできない仕掛け⁽¹⁹⁾」を言う。

なお、この原理を都市の空間構成にすべりこませたのが、たとえばオースマンのパリ改造計画であった。この点について多木浩二は、「パノプティコンが空間を見る側から構成したように、オースマンの都市も見られるもの (支配者) の視線にすみずみまでつらぬかれていた⁽²⁰⁾」と述べている。注目すべき指摘であると言ってよいだろう。

ところで、囚人 (見られるもの) と看守 (見るもの) との不可逆的な関係は、奈良という都市と外部としての春日山との間に結ばれるそれを連想させないでもない。春日山は都市成立の基盤でありながら、都市の外部で不可視かつ象徴的に機能していた。⁽²¹⁾したがって、そこにやどる外部のイメージも、それじたいは不可視のままに都市を現れせしめるのである。このような、本地垂迹説のはるかな変奏と言えなくもない仕組みは、エリアーデによって聖体示現⁽²²⁾と名づけられている。

聖なるものが聖体示現によって開示されるとき、それはしかしながら空間の均質性を破るばかりでなく、さらに周囲の無限に広がる非現実に対する絶対的現実の啓示をもたらす。聖なるものの

啓示によって世界は存在論的に創建される。何の目標⁽²³⁾もなく、見当のつけようもない無限に均質な空間のなかに、一つの絶対的な⁽²³⁾固定点 ∇ 、一つの \wedge 中心 ∇ が聖体示現によって露わられてくる。

かくして都市—奈良が成立する。しかも、聖体示現がある場所を聖化するのには「一つの存在様式から他の存在様式への逆説的移行点として天界と結びつけたことによる⁽²³⁾」と述べたエリアーデの見解は、奈良坂が聖体示現にふさわしい境界、あるいは限界であることを物語っているかのようではないか。常に外部からのまなざしに支えられてきた都市の記憶が、この地にパノプティコンを招き寄せた。つい、そんな妄想にとらわれてしまうのだが——。

かくして、奈良坂に境界のイメージを探る試みは、どうやら導入部を通過したようである。そこで次節では、奈良坂で中心的な役割を果たしてきた般若寺を主たる対象にして、簡単なスケッチが続けられるとともに、以後への展開が用意される。

三 境界としての奈良坂 (承前)

再び旧街道を北上すると、間もなく般若寺の楼門が右手に現われる (写真11)。般若寺を擁する般若寺町、ここでもまた境界にまつわる記憶をたずねることができた。『大乘院社寺雑事記』文明二年 (一四七〇) 八月二十一日の条からは、般若寺関所の存在が確認される。また、長祿元年 (一四五六) 十一月十四日の条には、徳政一揆の土民が

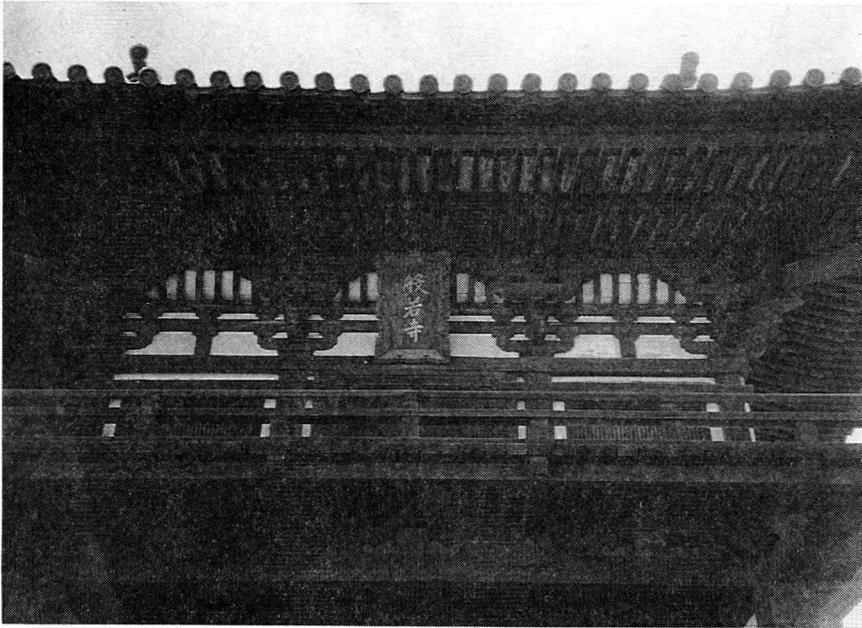


写真11 般若寺の楼門

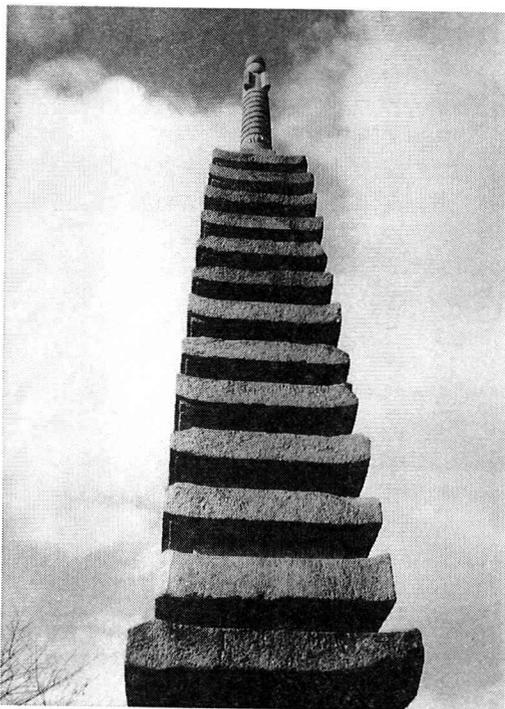


写真12 十三重石塔

般若寺近辺に集結したことが記されている。『平城坊目考』巻之三も、嘉吉元年（一四四〇）に般若寺近辺でおこった土一揆で、衆徒と馬借が戦闘をくりかえしたとする記録をのせているから、般若寺町が交通の中継地点として重視されていた事実が明らかになるのである。

般若寺についても別稿で詳しく述べることにして、ここでは奈良坂と関連する文脈でのみ語りたい。般若寺の創建ははっきりしないが、『和州社記』にはつぎのように記されている。天平七年（七三五）、聖武天皇が大般若経一部六百巻を地下に納めたことに因んで官寺・大般若寺となし、丈六文殊菩薩を安置するとともに十三重石塔を造立した⁽²⁴⁾。大般若経には悪霊退散を祈る仏教的側面ばかりでなく、転読という呪術的パフォーマンスに示されるように、日本古来の浄

め・祓いの思想も流入していると考えられる。したがって、さまざまな災厄を外部へと放逐し、五穀豊穰・鎮護国家を祈念するさいに有効であると思なされたにちがいない。『太平記』によれば、大塔宮護良親王は敗走中、当寺で大般若経の唐櫃に隠れて難を逃れている。大般若経の呪力が信じられていた可能性は大きいとしなければなるまい。

口伝は、神功皇后が三韓征伐のときにこの地で休んだとする⁽²⁵⁾。般若寺が外敵の除去を通じて、外部に対する意識と深く関わっていたとする推測が、ここでも裏づけられるかもしれない。本尊の文殊菩薩は北方常喜世界の歡喜藏摩尼宝積如来とも称されるから、般若寺には平城京の北方を守護する意図が塗りこめられていたはずである。また、やや西にはずれるが、奈良ドリームランドに隣接したところには、聖武天皇皇太子の那富山墓^{なふやま}がある。この墓の四隅には隼人石^{はやと}、大石、七疋狐などと呼ばれる人身獣面の石柱があり、そのうちのひとつの上部には「北」と刻みこまれている⁽²⁶⁾。これなども、異様な形状によって外敵を駆逐し、同じく平城京の北方を守護する働きが期待されていたのではあるまいか。

さらに、般若寺が外部との接点になっていたとする推測を補強してくれるいまひとつの口伝がある。それは、塔下の石室が莫大な財宝を秘匿しており、地下道が南大門崖下に通じていたとする内容であった。太田古朴はこの伝説について、般若寺蔵の桐箱に記された墨書から「元禄八年文殊殿の地下から人夫が掘り当てた石篋を開いたところ、曼荼羅を画いた厨子が立ち、其中に如意宝珠があった、之こそ高祖修

刀の能作性塔だと言う意味にとれるが、まさにこれが地下財宝埋納伝説の根拠である」と断定している。真偽はさておき、ここでも般若寺は、財宝の隠された地下世界への入口であると観念されているのである。

もう少し続けよう。『愚管抄』巻第五は、南都の焼き打ちを敢行した平重衡の消息について「重衡ヲバ、マサシク東大寺大佛ヤカタリシ大將軍ナリケリ、カク佛の御敵ウチテマイラスルシニセントテ、ワザト泉ノ木津ノ辺ニテ切テ、ソノ頸ハ奈良坂ニカケテケリ」と記している。こうした史実をもとにして、やがて奈良坂を舞台に展開される能『笠卒都婆』が誕生するのである。前シテの老人が「苦しき老いの坂なれど、苦しき老いの坂なれど、越ゆるや程なかるらん」とつぶやきながら登場するあたりに注目して、松岡心平はつぎのように述べる。

もちろん、奈良坂に出現するシテの姿が暗く重いのは、シテが、南都諸大寺の焼打ちという最大の仏罪を一身に背負う重衡の化身だからだ。しかし、暗く重いのは重衡だけではない。奈良坂自体が暗く重い場所、罪業・宿業の渦巻く奈良の闇の空間であった。
(中略)「寒林に骨を打つ、霊鬼泣く泣く前生の業を恨み……」という前シテのサシ謡は、奈良坂般若野の寒林(墓地)に佇む重衡の化身の姿を描いているのである。⁽²⁸⁾

後場に入っても重衡は奈良坂に呪縛され続ける。木仏(阿弥陀仏)に西方浄土を冀うにもかかわらず、彼は「涼しき道に入る月の、光は



写真13 十三重石塔に刻まれた西方阿弥陀仏

西の空に、至れども魄霊は、なほ木のもとに残り居て、ここぞ閻浮の奈良坂に、帰り来にけり」といったぐあいに棄て置かれてしまうのである。重衡の絶望的な心中が終始一貫して奈良坂の空間を借りて語られていることには、あらためて注意を促しておきたい。まさに奈良坂とは、「瞋恚を助けて賜び給へ、瞋恚を助けて賜び給へ」と叫び続ける重衡がけっして「越えられない」苦悩を象徴していたのであった。⁽²⁹⁾

なお余談ではあるが、太田古朴はひとつの興味深い伝説を紹介している。⁽³⁰⁾それによれば、西方阿弥陀仏が北面するように配置された般若寺の十三重石塔は、般若寺北端に埋葬された重衡を供養する目的で建立されたというのである（写真13）。信憑性は乏しいにしても、重衡と奈良坂との強い結びつきが偲ばれるではないか。

そろそろ奈良坂探訪のスケッチも、ひとまず終わりに近づいたようである。奈良阪町は、近世に入ってから京街道沿いに発展した奈良北端の町である。しかも東に抜ければ伊賀・伊勢に通じる（伊賀越）、いわば交通の要所であった。そして奈良豆比古神社は、その三叉路の前に位置している（写真14）。立地条件から推測するかぎりでは、道中の安全を祈願する交通の神として信仰されていたにちがいない。また『平城坊目考』巻之三は、奈良坂村が慶長年間（一五九六〜一六一五）までは孤村であったと記すとともに、近世に入って繁栄するにつれて、般若寺町との境界が不明になってきた。そのために、「境界の門戸」を般若寺町の北につくったという挿話を紹介している。宮座などの遺制をいまに残している理由の一端がうかがわれるようである。

奈良豆比古神社にはここで立ち入ることを避けて、町並みが途絶えるころ、旧道は再び国道二十四号線と合流する。突然に視界が開けた瞬間、その場所が登りつめた坂の頂上であったことに気づかされるはずである。なぜなら、前方の道は京都に向かってなだらかに下っていたのだから。視界をさえぎるものは何もなく、舗装された道路だけが延々と続いてゆく——(写真15)。奈良坂を通過した無数のステップは、おそらくはここで一呼吸おいたのち、新たな現実への第一歩を踏み出したのであろう。何にせよ、それと変わるところはない。古代のイメージを彷彿とさせる光景を眼前にしたとき、そのまなざしは古代から中世、近世をつらぬいて、やがて現代にまで届く長い射程で準備され



写真14 奈良豆比古神社の社殿(春日宮)



写真15 京都へ通じる道(国道24号線)

ることになるはずである。

なお、そのさきの県境に位置する高座については、法然が東大寺へ下向するさいに山上で説法したとする伝承が語られている（『奈良坊目拙解』ならびに『奈良名所記』）。別に、京から奈良を訪れる貴人のために休憩所として高座を設けたとも聞く⁽³¹⁾。そう言えば、文正元年（一四六六）に山城国の馬借が蜂起したのも、この高座であった（『大乘院寺社雜事記』）。また、京都に入って最初の集落、市坂（かつては一の坂と称した）。ここには幣羅坂の地名も残っている。境界をめぐる物語がこちら側でも、奈良坂と同じように展開されていたことを想像させてくれて、まことに興味は尽きないのである。

そのあたりにふれて、折口信夫はつぎのように語っている。「山の両側の境目は、坂本にあつて、坂路といふものが、どつちの神にも所属しないもの」⁽³²⁾であり、「関所といふものは、坂を中心として、坂の両方にあるもの」⁽³²⁾であり、また「山から異人が下りて来て、異人に會ふ場所は、さうした何方にも属しない處」⁽³³⁾である、と。彼が洩らしたこれらのことは、境界の性格をじつに鋭く描き出しているように思う。じっさい、石井進はその響きに触発されつつ、きわめて重要な指摘を行なっている。ここで紹介したい。

相当な幅とあつみをもった境界の領域、そこが人と物の交換・交流する場所にもなるのである。（中略）ただ一言、荘園内に定住している人々の目から見れば、そこは周縁だとしても、そうした道路上を移動し漂泊していく人々の立場に立てば、事態は逆転

するであろうということだけは指摘しておきたいと思う⁽³⁴⁾。

つづくわえるべきことは何もない。反復を恐れずに言うならば、奈良坂のこちらとあちらでさまざまに渦巻く、強度をはらんだ境界にまつわる物語を通過する過程じたいに、もうひとつの現実が示現するのである。したがって、それへのアプローチも、あくまで具体的な手続きとして試みられて然るべきであった。こうして、境界としての奈良坂に埋めこまれた外部のイメージを手がかりとして受けとめたところから、さらに奈良坂にまつわる事例の検討に向かってゆくことになるが、これは別稿の課題としなければならぬまい。

四 坂の途中にて

ところで本稿では、奈良坂にまつわる場の記憶について言及しながらも、翁舞でよく知られている奈良豆比古神社に立ち入ることを注意深く避けてきた（写真16）。その理由は、たとえば西瀬英紀のつぎのような言説に集約されるはずである。

奈良豆比古神社には「春日平城津彦神社鎮座本縁并奈良坂村舊記」と題される縁起が伝わっており、祭神田原太子（春日王Ⅱ志貴皇子）とその二子、浄人王、安貴王兄弟が散楽を舞ったことが田楽・猿楽の起源となったという説をのせている。翁舞の由来についても従来この旧記によって説明されることが多かったが、神社伝来の翁面の由来は説かれているものの、直接現行の翁舞の縁起



写真16 奈良豆比古神社の翁舞

となっていないことに着目すべきではないだろうか。たとえ祭神をめぐる貴種流離譚型の説話が中世からの伝承を伝えているにせよ、旧記そのものは近世のある時期に編纂されたものである以上、短絡的に三人立ちの翁と結びつけ、中世の国境の坂の民の芸能神信仰を読み解こうとするような解釈にはかなり問題があるように思われる⁽³⁵⁾。

長々と引用してしまっただが、同様の疑義ならば、じつは山路興造からも提出されている。氏は問題の春日王にまつわる奇怪な伝承⁽³⁶⁾について、奈良坂が中世以来、非人の集住地であった事実を下敷きにしていくとしながらも、「わが国の芸能史は、中世期に、この地に猿楽能を演じる芸能民が居住し、その芸能が今日に伝承されたと割り切るほど

単純ではない⁽³⁷⁾」ことを強調するのである。なるほどこの伝承にもよく語られているように、かつて奈良坂に住んでいた非人のなかには、さまざまな芸能を演じて生活の糧としていたものも少なくなかったらしい。しかし、そのうちのいかなるばあいも、いまなお演じられている翁舞につながってゆくことはない。そう言っただけかまわないと思う。

それはなぜか。しばらく氏の所説を追ってみよう。細かい論証の手続きは省略するが、氏によれば、奈良坂に専門の猿楽座が存在したらしき形跡は残されていない。そればかりか、大和における多くの中世村落のばあいと同じように、奈良坂の氏神として祭祀されていた春日社（現在の奈良豆比古神社）の祭礼に専門の猿楽座を迎えて、神事猿楽を演じてもらっていた可能性のほうが大きいのである。

たしかに、本稿でもいささか言及した地理的状况や、別稿であらためて説くつもりでいる歴史的経緯にそのまま導かれてしまうならば、奈良坂に猿楽を専業とする芸能座が存在したとする推測も、あながち根拠のないことではないような気がしてくる（それじたい、不思議なことであるが）。したがって、さらに奈良坂の芸能民が持っていた芸能神信仰という魅力的な組みあわせに短絡したとしても、やむを得ないのだろうか⁽³⁸⁾。じっさい、現在でも神社に伝承されている翁舞や所蔵されている多くの面は、その残存であると考えられなくもないのである。しかし、ここであらためて断言しておく。現存している翁舞の芸能や大和における芸能の存在形態は、けっしてそのような推測を裏づけるものではなかった。

そこで本稿では、氏にしたがって「現在この地に残る翁舞は、中世以来の村落共同体が、村落祭祀のため来演を願った猿楽座の演じていた翁舞が、ある時期に奈良坂の村人自身の手で演じられるようになった」ものであり、具体的には「猿楽座の所有していた演能権を村で買い取り、村人の芸能（民俗芸能化）としたもの」と捉えておきたいと思う。だとすれば、奈良豆比古神社はともかくとしても、そこで演じられている翁舞じたいから、境界としての奈良坂のはるかな反映を読みとろうとすることは、至難のわざであると言わなければならぬ。本稿が、奈良豆比古神社に立ち入ることを躊躇したのは、そのためであつた。⁽⁴⁰⁾

もとより、場にまつわる記憶はひとつではない。本稿では、奈良坂に堆積しているにちがいないさまざまな記憶のうち、とくに奈良坂が境界として認識されてきたことを強く印象づけてくれる手がかりに導かれながら、古代から現代にいたるまで歴史のなかの奈良坂におもむいては、その消息をたずねてきたのであつた。その結果、奈良坂には境界としての性格が何度となく書きこまれていたこと、いささかなりとも明らかにってきたように思われる。

ただし、つぎのように言うこともできるはずである。奈良豆比古神社の翁舞を新たな読解格子とするならば、近世になってから形成された、奈良坂に対するまったく異なった観念の所在が明らかになってくるかもしれない。⁽⁴¹⁾ また、近世のある時期に編纂された偽文書とおぼしき問題の伝承にしても、奈良坂にこめられた場の記憶を手がかりとし

ながら、かくも奇怪な神話的世界を構築していった、その消息じたいに奈良坂にまつわる境界のイメージが強く投影されていると見た。⁽⁴²⁾

もちろん、そのことを詳しく説明するためには、これらの伝承がつくられた社会的・経済的背景を明らかにしておかなければならないのだが、しかしながらいずれも当面の課題ではなかった。本稿では、いくらか恣意的になってしまふことを覚悟しながらも、まず歴史のなかの奈良坂をふちどっている境界のイメージをたしかめようとしたのである。とりわけ問題の伝承を扱うさいには、あらかじめ上記のごとき仕掛けを整えておく必要があるのではないだろうか。

ここで突然ではあるが、体験に基づく挿話を紹介しておこう。それは、本稿の基調低音をなしている場の記憶という主題をめぐる、ひとつの反省を促してくれる。――昭和六十年（一九八五）十月八日午後八時前、西日本を中心に各地で「光る物体」が目撃された。翌日の朝日新聞朝刊から目撃者の談話を拾ってみると、たとえつぎのようなぐあいである。

突然北から南に向かって光の帯が飛んでいくのが見えた。一番前にひとときわ明るい白い光が見え、その後ろに真赤な光が六本、線を引くような形で見えた。

ちょうど同時刻、奈良市奈良阪町の奈良豆比古神社では、まもなく翁舞がはじまろうとしていた。そしていくらか高揚した雰囲気の中、ごったがえしていた境内からも、やはり「光る物体」の軌跡をはっきりと確認することができたのであつた。それはたしかに、新聞が紹介

する目撃者の談話と同じように「まるでタイムマツを持った人が走っているように見えた」し、「まるでニジ色の火花が飛んでいるようだった」と記憶している。

ところが奇妙なことに、いざこうした偶然の起きることが起こってみると、場の記憶をたずねようとする事前の姿勢は、つい「こわい考(43)え」を引き寄せてしまいがちである。つまるところ、この「光る物体」はどうやらソ連の人工衛星を打ち上げるさいに使われた最終段ロケットの破片だったらしいのだが、妄想はそれとはまったく無関係に肥大してゆく。このさい、ことの真相は問題になどならない。じじつ、奈良比古神社の境内でも、奈良坂に関する一定量の知識を備えているとおぼしき人たちが冗談とも本気ともつかない、つぎのようなささやきをかかわしているのを聞いてしまった。曰く、これは翁の魂魄だの、他界に通じている奈良坂にしてはじめてなせるわざだの（そんな馬鹿な！）と、耳を疑うばかりである。

ところが、会話を気をとられていくうちに、いつの間にかじぶんでも、そんな妄想について思いをめぐらせているのだから恐ろしい。こうしてみると、場の記憶を掘り起こそうとする姿勢は、ともすれば対象そのものが発しているさまざまな声を汲みあげるのではなく、むしろそれを抑圧してゆく結果になるのではないだろうか。さらに、場の記憶についての知識が実態から離れたところで認識論的前提として流通するようになると、何らかの連想を可能にしてくれる対象は、事前に設けられた文脈に沿って説明されてしまうのである。かくして、何

とも秘儀的な解釈だけがひとり歩きをはじめることになる。(44)

いまここで、上記の挿話を紹介しようと思いついたのは、ほかでもない。じぶんじんがいつも、同じような事態に陥ってしまう危険にさらされているからであった。そうならないためにも、場にまつわって新たな記憶がつけられてゆく消息について、実態にそくした考察を心がけなければなるまい。場の記憶という主題はたしかに興味深い視座を提供してくれるのだが、過度に暴走することは避けたいものである。別の表現を試みておこなうならば、こうした議論は、記憶が身体化されている水準でなされてこそ、はじめて効力を発揮するように思う。(45)

しかしながら、けっして落胆する必要はない。奈良坂に見られる境界としての性格を手がかりにしながら、場にまつわる記憶をたずねるための方途は、ほかにもまだ残されている。最後に、集合的記憶に関する落合一泰の議論を思い出し出しておきたい。

表象行為の記述分析では、すべからず、集合的記憶という視点が有効性を発揮する部分があるにちがいない。たとえば、芸能における集合的記憶の役割を考察するならば、夢幻能や歌舞伎や民俗芸能が興味深い材料を提供するだろうし、風景認識にも同様のことが言える。(46)

こうしたことばに勇気づけられて、歴史のなかの奈良坂に立ち戻るとき、場の記憶が書きこまれた対象として、かつてそこで演じられていた広義の芸能——ここでは、西大寺流の律僧であった叡尊と忍性が展開した一連の非人救済事業を含蓄している——があったことに気づ

くはずである⁽⁴⁷⁾。しかも、その消息を知るための手がかりは多く残されている。「芸能としての救済」と題される別稿は、かかる課題にとりくむべく記されることになるだろう。奈良坂を舞台にして展開された場の記憶をたずねる旅は、どうやら坂の途中にさしかかったばかりのようである。

註

- (1) 以下、奈良坂および奈良山に関する記述は、主に『日本歴史地名大系』第30巻、平凡社、一九八一年、四九五・五五一頁、による。また、ふたつの奈良坂については、奈良市同和地区史的調査委員会編『奈良の部落史』本文編、奈良市、一九八三年、の古代編第二章第一節「二つの奈良坂」(和田萃執筆)に詳しく記されている。
- (2) 『平城坊目考』巻之三ならびに『奈良坊目拙解』には、現在の油阪町も奈良坂と称されていたとある。
- (3) もっとも『帝王編年記』には「般若寺添上郡奈良坂」と記されているから、般若越も古くから奈良坂と称されていたのかもしれない。
- (4) デ・ホロート『風水』、牧尾良海訳、大正大学出版部、一九七七年、二六頁、ならびに吉野裕子『陰陽五行と日本の民俗』、人文書院、一九八三年、三二一―三三頁。
- (5) 柳田国男「峠に関する二三の考察」『定本柳田国男集』第二巻、筑摩書房、二二六―二二七頁。
- (6) 上野清『易学の研究』、歴史図書社、一九八〇年、二二〇頁、ならびにデ・ホロート、前掲書、四八―四九頁。
- (7) 桜井徳太郎編『民間信仰辞典』、東京堂出版、一九八〇年、九九頁。
- (8) 集合的記憶については、落合一泰「叫びと煙突——記憶のエスノポエティクスにむけて——」『へるめす』第27号、一九九〇年、参照。
- (9) 以下、川上蛭子神社に関する記述は、山田熊夫『奈良町風土記』、豊住書店、一九七六年、一三〇頁、による。
- (10) 橋本『春日若宮おん祭と奈良のコスモロジー』、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、一九八六年、一六一―二二頁。そのなかでも

引用したが、栗本慎一郎『光の都市 闇の都市』、青土社、一九八二年、三八―四〇頁、には、他界につながると観念された奈良坂について、きわめて興味深い指摘がのる。

- (11) 奈良市編『奈良市史』地理篇、吉川弘文館、一九七〇年、三一頁。
- (12) 山野正彦「日常景観のなかの恐怖の場所」『生と死の人類学』、講談社、一九八五年、三〇頁。
- (13) 和島芳男「敬尊・忍性」、吉川弘文館、一九五九年、一〇七頁。
- (14) 橋本「芸能としての救済——統・奈良坂小考——」(未発表)、参照。以下で言う別稿とはすべて、この統編を指している。なお、本稿では言及しなかった奈良坂非人についての私見は、そのなかに記しておいた。奈良坂非人に関する研究成果は多いが、近年の水準を要領よくまとめたものとしては、奈良市同和地区史的調査委員会編、前掲書、の中世編第二章第一節「奈良坂非人と大和七宿」と第二節「非人集団の職能と存在形態」(青盛透執筆)、ならびに同第三節「敬尊・忍性による「非人」の救済事業」(横井清執筆)がある。
- (15) 喜田貞吉「大和に於ける唱門師の研究(中)」『民族と歴史』第四巻第一號、一九二〇年、一頁。
- (16) ミシェル・フーコー『監獄の誕生』、田村俊訳、新潮社、一九七七年、はパノプティコンの解説を通じて近代社会のシステムを明らかにする試みであった。
- (17) 前田愛「獄舎のユートピア」『叢書文化の現在』4、岩波書店、一九八一年、一二四頁。
- (18) 同書、一三一頁。
- (19) 同書、一三二頁。
- (20) 多木浩二「視線の政治学」『眼の隠喩』、青土社、一九八二年、一二二頁。
- (21) 橋本、前掲書、一八・二九頁。
- (22) M・エリアーデ『聖と俗』、風間敏夫訳、法政大学出版局、一九六九年、一三頁。
- (23) 同書、一八頁。
- (24) 般若寺の創建をめぐる諸説は、『日本歴史地名大系』第30巻、五五〇頁、に概観されている。

- (25) 以下、般若寺に関する伝承は、太田古朴『般若寺』、綜芸社、一九〇四年、四一五頁、による。
- (26) 『日本歴史地名大系』第30巻、五九〇頁、ならびに吉田東伍『増補大日本地名辞書』第二巻、富山房、一九六九年、二七八・二七九頁。
- (27) 太田古朴、前掲書、二六頁。
- (28) 松岡心平「重衡または心の修羅劇」『第十二回橋の会特別公演パンフレット』、一九八三年、九頁。
- (29) ここでは、論旨の關係から『笠卒都婆』に描かれた奈良坂の、とくに境界としての性格に注目したが、謡曲のなかに登場する奈良坂のイメージのばあい、じつは西大寺流の律僧であった叡尊による一連の非人救済事業が大きく影響していたのではなかったか。それは、境界としての奈良坂に対してさらに積極的な意味を与えてゆく試みの所産として位置づけられるべきであるように思われる。詳しくは、橋本「芸能としての救済——統・奈良坂小考——」を参照のこと。
- (30) 太田古朴、前掲書、一一頁。
- (31) 山田熊夫、前掲書、一三五頁。
- (32) 折口信夫「枕草紙解説」『折口信夫全集』第十巻、中央公論社、一一一—一二頁。しかし、これで引用を終えてしまうのは惜しい。同書、二一三頁、には、より具体的な思考が過ぎるように示されている。すなわち、「関は、坂を中心としてゐる。つまりその坂といふのは、兩國の境といふ事には事実ならない。これは此處からこちらが自分の領分、あちらがとなり村の領分といふ事は、少しむづかしい事である。何故となれば、どつちともつかない土地がなければならぬ。これを、今でも行なはれてゐる習慣でいふと、AとBと、両方の村境に、どつちにも塞の神がなければならぬ。處が近世では、大體都合よく行つてゐる。神が歩いて来るものと考へるから、東境にあれば、西境にはない。吾々から考へると、B村ならB村の兩づめに、境の神がなければならぬ。吾々から考へると、どつちにもつかぬ、空虚な土地がある。それであればこそ、異人と、人があへるのである。つまりお互いにさしつかへのない所である。」
- (33) 同「女房歌の発生」『折口信夫全集』第十巻、一三七頁。
- (34) 石井進「坂と境」『日本民俗文化大系』第六巻、小学館、一九八四年、一五〇—一五一頁。
- (35) 西瀨英紀「語りの翁とひとり翁——民俗芸能の翁研究をめぐって——」『藝能史研究』第一〇九号、一九九〇年、五一頁。なお同書には、「奈良豆比古神社の翁舞の伝承」と題した一節が含まれており、本稿の関心にとつてきわめて有益である。また、川島将生「奈良豆比古神社の翁舞」『藝能史研究』第二四号、一九六九年、は、奈良坂の地理的状況や奈良坂非人の歴史の経緯を概括しながらも、問題の翁舞については報告にとどめており、双方の関連についてはとりたてて言及していない。賢明な措置と言ふべきか。
- (36) 詳しい内容については、『平城坊目考』巻之三、ならびに藪田嘉一郎『能楽風土記』、檜書店、一九七二年、所収の「大和国添上郡奈良奈良坂旧記」を参照のこと。また、神道大系編纂会編『神道大系』神社編五（大和国）、神道大系編纂会、一九八七年、にも「奈良豆比古神社史料」として二種の史料が収録されている。いずれも偽文書である可能性が高く、信憑性に乏しいが、中世における奈良坂非人の実態を一端でも知るための手がかりとしては、やはり貴重である。古くは喜田貞吉「宿神考」『民族と歴史』第四巻第五號、一九二〇年、のなかで言及されているが、服部幸雄「宿神論（下）」『藝能神信仰の根源に在るもの——』『文学』第四十三巻第二号、一九七五年、同「逆髪（宮中）」『放浪藝能民の藝能神信仰について——』『文学』第四十六巻第五号、一九七七年、などで大きくとりあげられた。
- (37) 山路興造「奈良市奈良坂町奈良豆比古神社の翁舞」『大系 日本 歴史と芸能』第七巻（宮座と村）、平凡社、一九九〇年、二〇〇頁、なお、以下の記述も同書によった。
- (38) 早い時期にこのような推測を展開したものとしては、藪田嘉一郎、前掲書、があげられる。とりわけ、同書をもとにして記されたとおぼしき、篠田浩一郎「二つの坂」『中世への旅——歴史の深層をたずねて——』、朝日新聞社、一九七八年、は、何と言つたらよいのだろう。氏じしんも末尾にいたつて「私はまた果てのない想像にふけり出す」と記しているように、例の伝承からはじまって、果ては照葉樹林や狩猟文化まで飛び出してくる始末なのである。随筆ならば許されるのかもしれないが、これでは何も言っていないに等しく、とてもついてゆけない。また、これほどではないにしても、同じような誤解が不幸にもかたちをなしてしま

- ったばあいも、けっして少なくない。その一例としてここでは、山口昌男と松岡心平との対談「全体演劇としての能」(山口昌男『古典の詩学——山口昌男国文学対談集——』、人文書院、一九八九年、所収)における山口昌男の発言をあげておく。一五四—一五六頁、参照。
- (39) 山路興造、前掲書、二〇二頁。
- (40) しかし正直に告白してしまうと、筆者しんにも、註38にあげた言説とさほど変わらない妄想を膨らませていた時期がかつてあったのだが——。
- (41) いまのところ、その見通しはまったく立っていないが、奈良豆比古神社とその翁舞については、前掲書のほかにも多くの論考が記されており、さしあたり参考になる。そのすべてを網羅することはできないので、ここでは事典のたぐいを除いて眼にとまったものを、いくつか紹介しておく。山田熊夫「奈良豆比古神社の宮座と年中行事」『歴史手帖』第十一卷八号、一九八三年、ならびに上田伴弘「式内社奈良豆比古神社とその共同体」『古奈良—正統—研究調査』、共同精版印刷、一九七六年、など。
- (42) たとえば、服部幸雄「宿神論(下)——藝能神信仰の根源に在るもの——」、八三頁、同「逆髪(中)——放浪藝能民の藝能神信仰について——」、九八頁、などを参照のこと。
- (43) このことばは、いがらしみきお『ほのぼの』1、竹書房、一九八八年、三六頁、に収録された「自分で考えてみよう」のなかで、はじめて用いられた。
- (44) 前述の「こわい考え」とは、このことを言っている。おわかりだろうか。肝要なのは、解釈の読解格子が織りなす付置連関を解釈することにはかならない。
- (45) 落合一泰、前掲書、三九頁。
- (46) 身体化された集合的記憶については、戸井田道造『忘れの構造』、筑摩書房、一九八四年、が、きわめて深い洞察を展開している。
- (47) たとえば、後藤淑「奈良坂芸能注」『芸能』第三十二卷第七号、一九九〇年、は、歴史のなかの奈良坂に注目しながら、そこで行なわれた盗人拷問の行事を広義の芸能として捉えた、覚書とでも言うべきものである。

(本館 民俗研究部)

Brief Study on Narazaka Slope, or Concerning the Memory of the Scene

HASHIMOTO Hiroyuki

Once there were two Narazaka Slopes. There are two passes passing through Narayama Mountain (though it is only small hill) that extends from the east to the west on the frontier between the Province of Yamato and that of Yamashiro, one on the western ridge is called Utahime Pass and another on the east, Hannya Pass; they are both important roads connecting Yamato with Yamashiro. In this paper, I wish to pay attention to Narazaka Slope on the Hannya Pass.

After passing the period when Heiankyo was the capital, in the Middle Ages when the center of Nara moved to the east, and even in the present time, the image of Narazaka Slope seems to be always spun from the bundle of the collective memory twining about this region. Such Narazaka seems to offer a very effective clue for someone who seek for circumstances of how the new memories about the scene are being born. This paper has a character of, so to speak, a preliminary study for the matters mentioned above.

Thus, the interest of this paper is directed first to elucidate the character of the border given to Narazaka. While we continue to try to grasp the meaning of various messages about a peculiar "scene" called Narazaka, it is certain that the external image buried in Narazaka as the border will gradually surface to our eyes.

However, the memory about the scene is not single. This paper seeks for the circumstances about the generation of various memories traveling through Narazaka in history from the antiquity to the contemporary period, by being led by the clue that gave us a strong impression, out of various memories that must have been accumulated in Narazaka, of its being as the border.

Perspective that obtained in this paper wakes up our interest in the performing arts in wider sense of the word, played once around the Narazaka. The separate article entitled "Salvation as the performing art" will be elaborated for discussing such a subject.